

特論1 土地形成史

図版でたどる尼崎地域の土地形成



Landsat 衛星写真でみる大阪湾岸地域 尼崎市域を赤いラインで表示
画像データ提供：Global Land Cover Facility (GLCF), University of Maryland

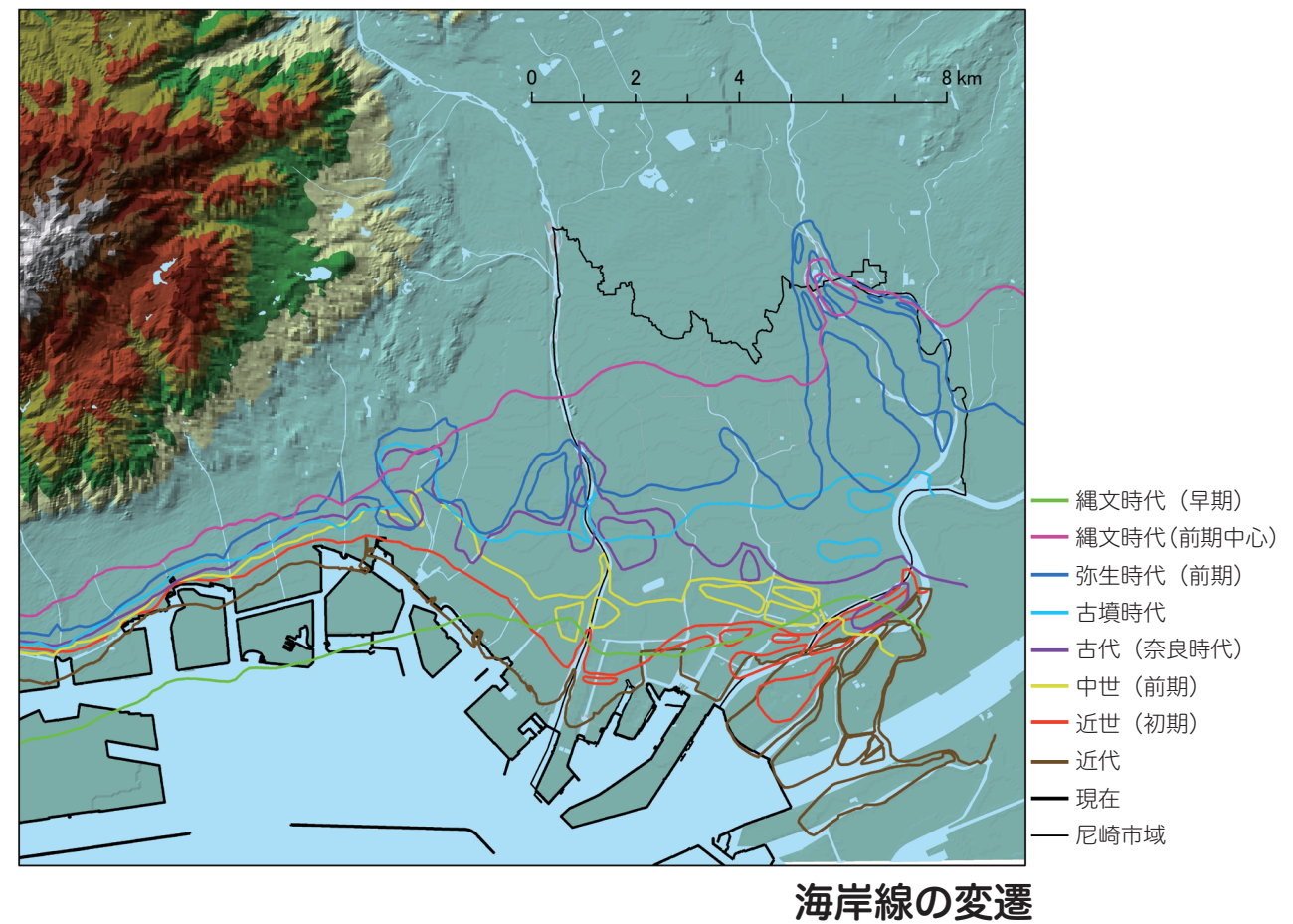
〔土地形成図版掲載にあたって〕

この項目には、尼崎地域の各時代・分野の歴史を調べるうえで基礎となる、時代別土地形成史の図版を作成・掲載しました。

掲載図版は、『図説尼崎の歴史』序説2「尼崎市域の微地形」（田中眞吾氏執筆）の知見をもとに、各時代の遺跡分布、絵図・地図等の文献史料から得られる情報、近代以降の地形情報などを総合的に調査・検討し、海岸線や河川流路などの地形を推定復元して作成しました。なお、各図版のベースとなる地形は、国土地理院の基盤地図情報を用いて作成しています。

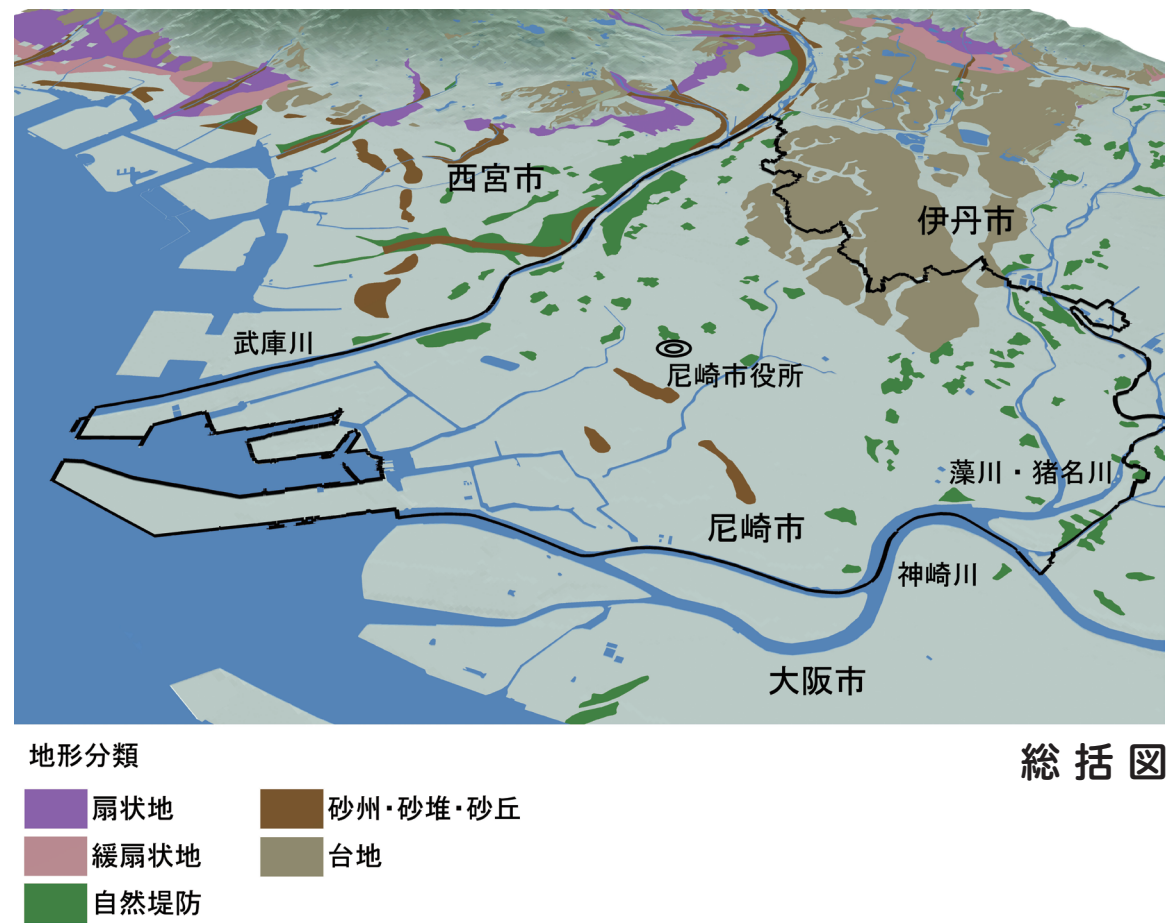
掲載図版作成作業工程の分担は次のとおりです。

森岡秀人 もりおかひでと 遺跡分布調査及び現地地形調査による海岸線・河川流路等推定復元
田中貴宏 たなかたかひろ 文献史料情報・地形情報等の追加、掲載図版データ作成



海岸線の変遷

次頁以下の時代別図版に示した各時代の海岸線を、現在の地形図版上に描いたものです。
現尼崎市域を含む阪神地域の海岸線が、時代とともに大きく変化していることがわかります。



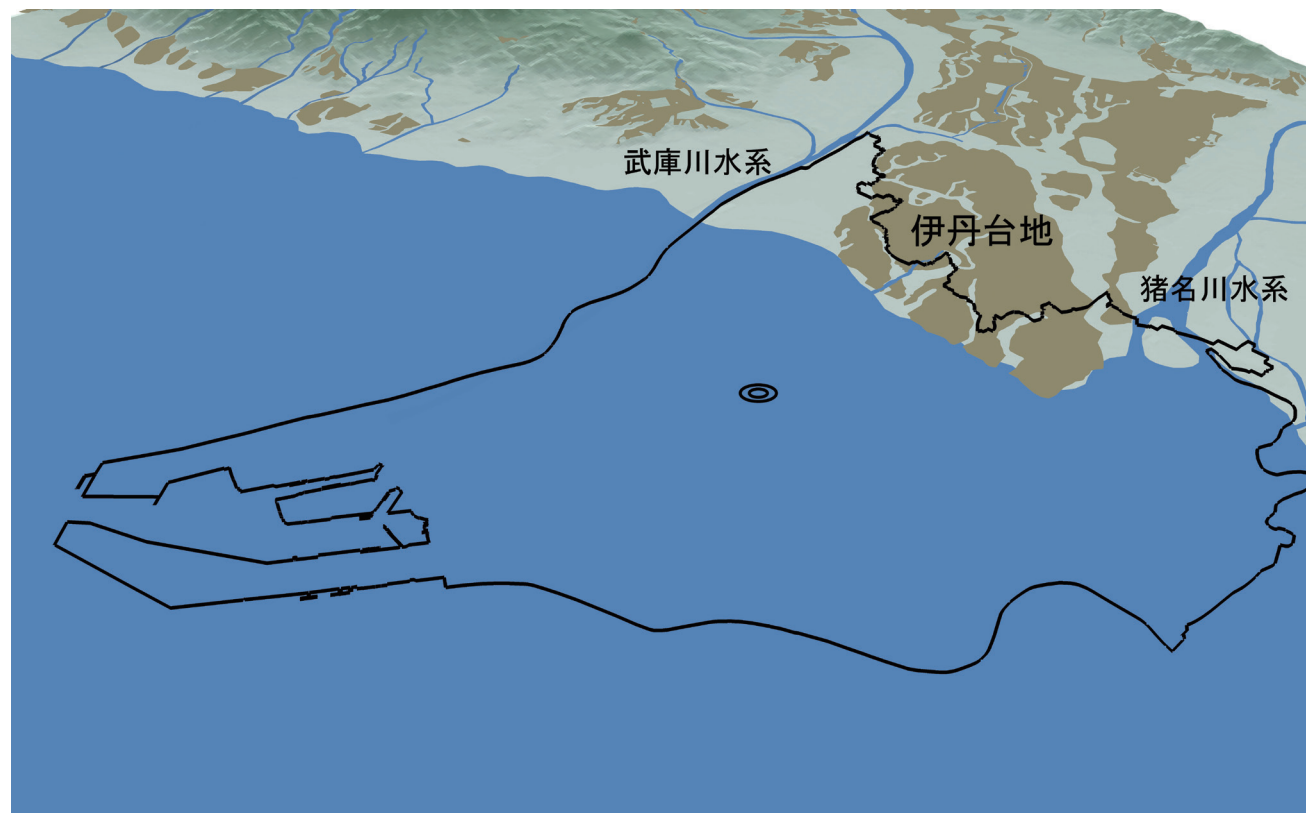
総括図

現在の地形の上に地形分類と自治体名称、河川名称、尼崎市域の境界線を描き、合わせてランドマークとなる尼崎市役所の位置を示しました。
地形分類の典拠は、国土地理院作成の「二万五千分の一土地条件図（大阪西北部）」です。
尼崎市役所の位置は、次頁以下のすべての図版上に、同じ二重丸を用いて表示しています。



縄文時代（早期）

縄文時代（早期）
縄文時代（早期）の地形や海・河川を表現し、その上に河川水系の名称、伊丹台地、現在の尼崎市域の境界線、尼崎市役所の位置を描いたものです。



縄文時代（前期中心）

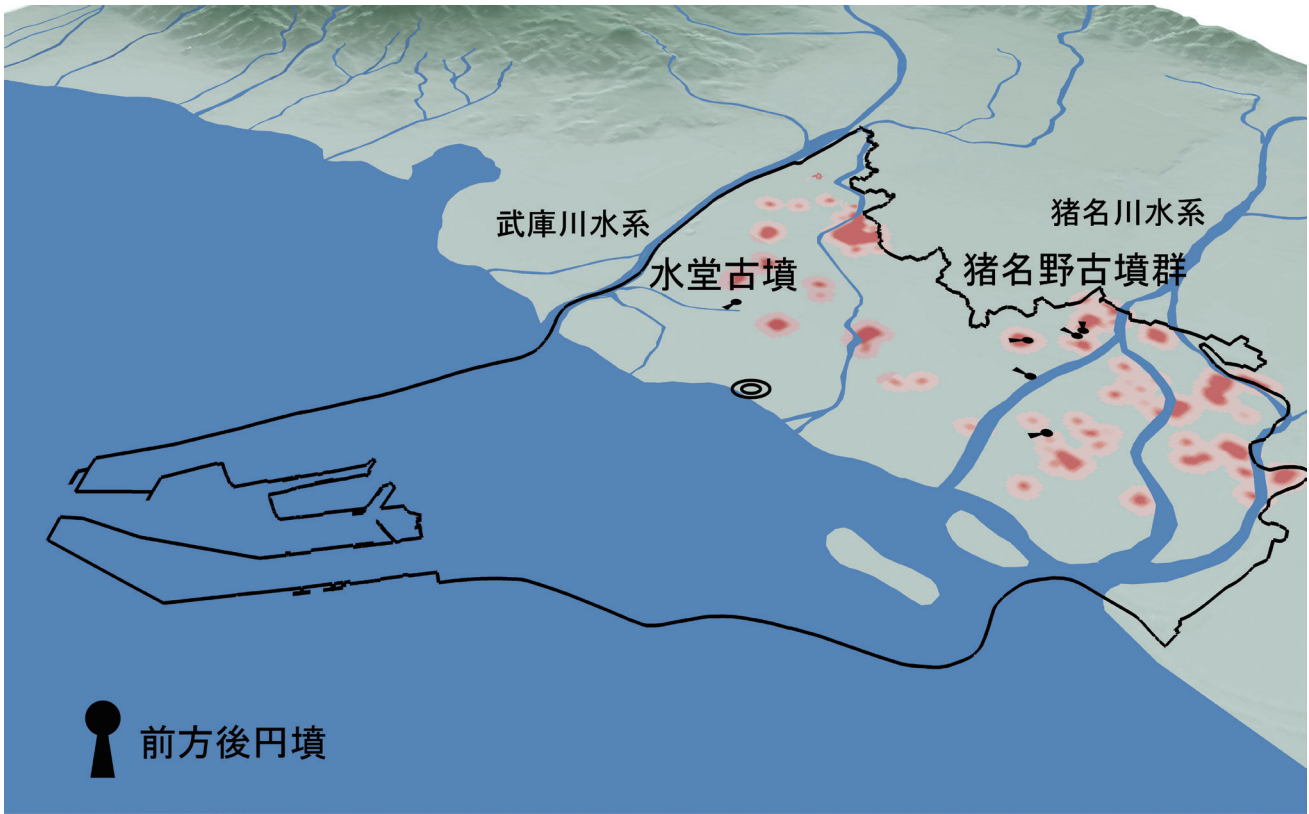
縄文時代（前期中心）
縄文時代（前期中心）の地形や海・河川を表現し、その上に河川水系の名称、伊丹台地、現在の尼崎市域の境界線、尼崎市役所の位置を描いたものです。
縄文海進がピークを迎えたと考えられるこの時期、伊丹台地の南縁部付近が海岸線となり、市域の多くは海域に属していました。

〔海進・海退〕 海面上昇や陸地沈降による海岸線の陸側への移動を「海進」、反対の現象を「海退」と呼びます。気候温暖化による海水の熱膨張や大陸上氷床の融解により、海水面が上昇し海進となり、寒冷化すると海退となります。地球規模の周期的気候変動により、数万年ないし十万年単位の長期サイクルで温暖化（海進）と寒冷化（海退）が繰り返されると考えられています。



弥生時代（前期）

弥生時代（前期）
弥生時代（前期）の地形や海・河川を表現し、その上に河川水系の名称、現在の尼崎市域の境界線、尼崎市役所の位置を描いたものです。
加えて、「尼崎市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び手引き」（尼崎市教育委員会）に掲載される遺跡のうち、時代区分に弥生時代が含まれるものを赤色で表示しました。
縄文海進後の海退現象が始まり、市域北部の陸地化が進んでいます。
人々が市域に住み始めるこの時代、猪名川水系や武庫川水系の流域に生活の痕跡を確認することができます。



古墳時代

古墳時代
古墳時代の地形や海・河川を表現し、その上に河川水系の名称、現在の尼崎市域の境界線、尼崎市役所の位置を描いたものです。
加えて、「尼崎市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び手引き」（尼崎市教育委員会）に掲載される遺跡のうち時代区分に古墳時代が含まれるものを赤色で表示し、さらに存在が確認される前方後円墳を形状・方位を反映する形で表示しました。
弥生時代に比して、猪名川・武庫川両水系河口部の土地形成が進展しています。
水堂古墳を除いて、市域古墳の多くは猪名野古墳群に属していました。



古代(奈良時代)

古代（奈良時代）
 古代（奈良時代）の地形や海・河川・砂州列を表現し、その上に河川水系の名称、この時代の主要な地名、現在の尼崎市域の境界線、尼崎市役所の位置を描いたものです。

加えて、「尼崎市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び手引き」（尼崎市教育委員会）に掲載される遺跡のうち、時代区分に奈良時代が含まれるものを赤色で表示しました。

延暦四年（七八五）に神崎川が開削され淀川とつながったのち、河口に近い神崎は長岡京・平安京と瀬戸内・西国を結ぶ湊のひとつとして栄え、遊女が集まる歓楽地としても知られるようになります。

同じく神崎川の河口近くに形成されたのが、天平勝宝八年（七五六）に孝謙天皇の命により東大寺に勅施入された荘園・猪名荘です。勅施入とは、天皇の命により土地や財物などを寺社に寄進することをいいます。尼崎市教育委員会所蔵の「摂津職河辺郡猪名所地図」をもとに、荘園開発の過程で形成されたと考えられる築堤・水路を図上に示しました。荘域の北側、管理事務所や倉庫などがあつたと考えられる場所（潮江、現JR尼崎駅北側）からは、駅前再開発工事にもない猪名庄遺跡が出土しています。

猪名荘の北と南に形成された東西方向の砂州列を、模式的にラインとして表示しました。この付近では西から東へと流れる大阪湾の潮流が運ぶ土砂が堆積し、砂州がつながり新たな海岸線となり、後背の低湿な潟湖（ラグーン）が陸地化していく過程を表しています。

流れが比較のおだやかな猪名川・神崎川水系に対して、六甲山系の土砂を多く運ぶ荒れ川であった武庫川河口付近には、巨大な三角州が形成されていたと考えられます。



中世（前期）

中世（前期）
 中世（前期）の地形や海・河川・砂州列を表現し、その上に河川水系の名称、この時代の主要な地名、現在の尼崎市域の境界線、尼崎市役所の位置を描いたものです。

加えて、「尼崎市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び手引き」（尼崎市教育委員会）に掲載される遺跡のうち、時代区分に中世が含まれるものを赤色で表示しました。猪名荘の南に長洲荘が形成され、さらにその南に大物・尼崎といった港町が出現します。古代の神崎と同じく、淀川・神崎川の流れを通じて京と瀬戸内・西国、さらには大陸を結ぶ中継港として、大きな繁栄を見せました。

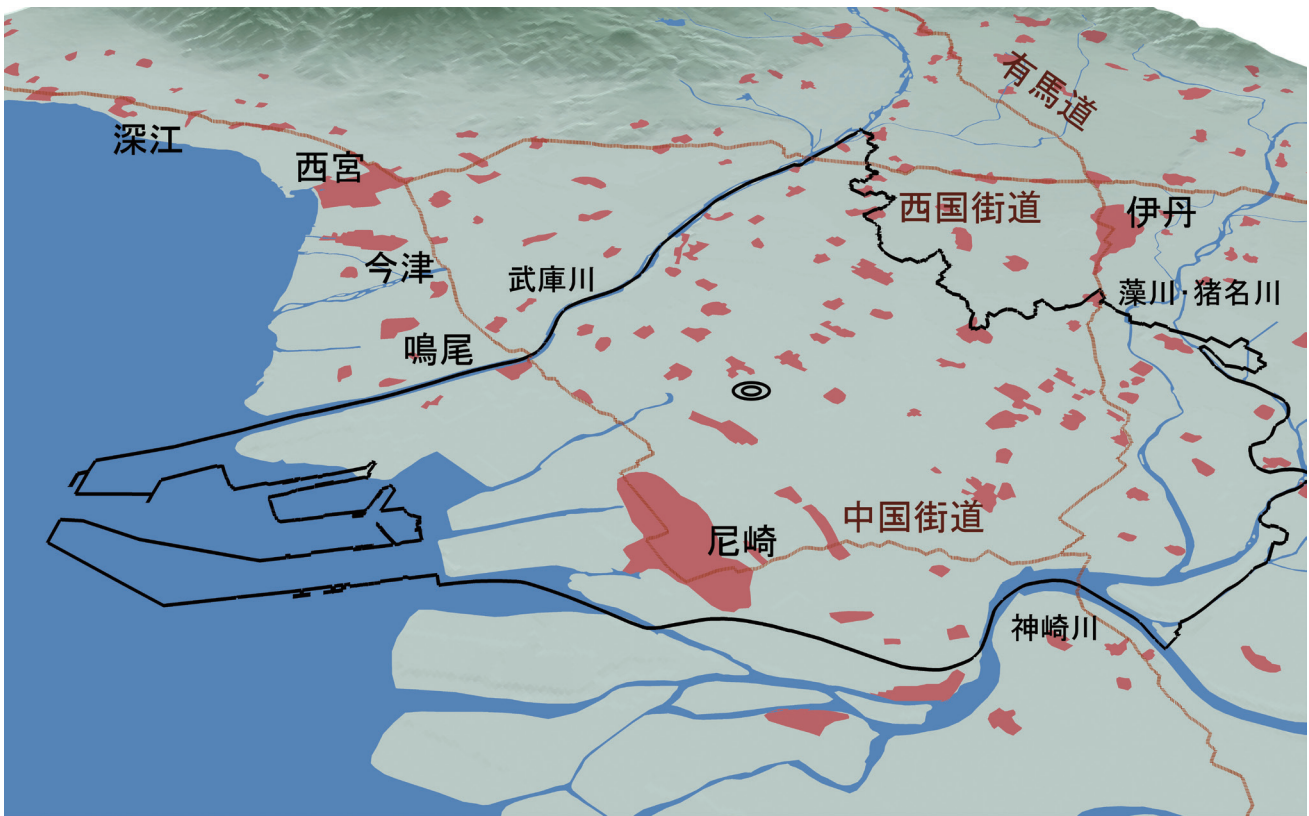
猪名荘・長洲荘にとどまらず、市域各所において開発が進められ、新たな農業集落が形成され荘園が立荘されます。ともに荘園領主である東大寺と鴨社が争った長洲荘・長洲御厨の例に代表されるように、人の支配や土地の領有をめぐる荘園間の争いもめずらしくありませんでした。

中世後期には、尼崎と伊丹の中間に位置する街道沿いの在郷町・塚口が記録に現れます。応永一六年（一四〇九）建立と伝えられる浄土真宗（一向宗）塚口御坊の寺内町として、濠と土塁が集落を囲む環濠集落を形成していました。



近世（初期）

近世（初期）
近世（初期）の地形や海・河川を表現し、その上に河川水系の名称、この時代の主要な地名、現在の尼崎市域の境界線、尼崎市役所の位置を描いたものです。加えて、「大日本帝国参謀本部陸軍部測量局明治一八年測量 二万分之一仮製地形図」に描かれる道筋を参考に、この時代の主要な街道を表示しました。中世後期から近世初頭にかけて村切りが行なわれ、近世の村が形成されていきます。猪名川・武庫川両水系から市域全域へと農業用水を導く井（用水路）と井組（水利組合）が形成され、村々の農業生産の基盤となっていました。近世初頭には譜代大名・戸田氏鉄が尼崎藩主として入封し、中世尼崎町に新たな近世城郭・尼崎城を築城します。あわせて町場に対する都市改造を行ない、東西に広がる城下町を建設します。城下町の南から武庫川にかけての海岸部一帯では、近世を通じて次々と生まれる砂州を干拓し、島状の新たな農地とする新田地帯が形成されていきました。



近代

町と村

近代

近代の地形や海・河川を表現し、その上に河川名称、近代初頭の町と村、現在の尼崎市域の境界線、尼崎市役所の位置を描いたものです。加えて、近世と同じく「大日本帝国参謀本部陸軍部測量局明治一八年測量 二万分之一仮製地形図」に描かれる道筋を参考に、近代初頭の主要な街道を表示しました。明治二年（一八八九）に市制・町村制が施行され、近世以来の町・村を統合して新たな行政区・組織が編成されます。市域では、尼崎城下町を中心とする尼崎町と、小田・大庄・立花・武庫・園田という五村が成立しました。明治後期以降は、阪神地域の工業化・都市化の流れのなか、神崎川流域から臨海部にかけて工場立地が進みます。加えて、市域を横断する鉄道・道路などの交通網が整備され、沿線地域を中心に各所に新たな住宅地や商業地が形成され、市街地化が進展していきます。こういった都市化や人口の増大を背景として、大正五年（一九一六）、尼崎町に立花村域の東難波・西難波を加え、初の尼崎市制が施行されます。昭和十一年（一九三六）には小田村と解消合併し、昭和十七年に大庄・立花・武庫村を合併、昭和二十二年には園田村を合併し、ほぼ現在の尼崎市域となりました。市制施行・市村合併が進められた大正・昭和戦前期から戦後復興・高度経済成長期にかけて、臨海部を中心とする重化学工業地帯形成及び市域全域の都市化・市街地化が進展し、尼崎市は阪神工業地帯の中核を占める都市へと変貌をとげていきました。



現在

現在

現在の地形の上に、尼崎市域の境界線及び尼崎市役所の位置を描いたものです。加えて、各市の「二五〇〇分の一地形図」により、街区・建物を表示しました。アジア太平洋戦争末期の戦災被害やその前後の風水害被害、平成七年（一九九五）の阪神・淡路大震災による被災からの復興を経た、市域及び阪神地域の現在の姿です。市街地化が平野部のほぼ全域に及んでいる様子を、読み取ることができます。

（原稿作成） 田中 貴宏／森岡 秀人／地域研究史料館（担当 辻川敦）